

1月24日（土）25日（日）に行われた教育研究全国集会人権教育分科会に参加しました。人権教育分科会では23本のレポート報告がありました。熊本からの報告は、「子どものくらしの中に差別の現実と解放への願いを読み取る」という討議の柱に位置づけられていました。8分の報告時間の中で、子どもが向き合っている差別の厳しさと、その中で力を合わせて生きている家族の姿を報告することができました。また、2日目の総括討論での報告時間は3分でした。限られた時間の中、報告者のご家族のことを、むらの親子からの学びと重ねて報告することができました。子どもや保護者との信頼関係の深さがレポートを成立させているのだと思いました。

他県の報告では、総括討論での三重の報告が心に残りました。人権教育に取り組んでいる熱源は何かという問いかけに、「部落問題について考える時には部落出身の友だちのことが頭に浮かぶ。外国人の話題になると在日の友人の顔が浮かぶ。『障害』者差別の課題を考える時には、『障害』のある友人の顔が浮かぶ。それが自分の活動の原動力になっている。」というものでした。

人との出会いが報告者の原動力になっています。一人の教職員が人権教育を進める土台にも、やはり人との出会いとつながりがあるのだと感じさせられました。

今年は、九州の報告者から子どもとの関わりと同時に、報告者自身のくらしを語る報告があり、ぬくもりを感じ、うれしく思いました。共同研究者の池田さんの「人権問題を自分の事として考えるということは、自分自身のことを考えること」に具体的に応えることができた報告者の姿だったと思います。

そんなことを考えて熊本に帰ると、新聞の「折々の言葉」で、「原則も大事だけど、僕は個別の事象にしっかりと対応していくことが必要だと思っている。」というある中学校の先生の言葉が紹介されていました。

そうだと思いました。